

ロシア語の様相述語

—可能世界意味論と語用論の中で—

三谷 恵子

...そうあるより他ではありえないことを必然的
(アナンカイオン) にそうあると我々は言っている。
そしてこの意味での「必然的」に準じておそらくその
他の意味のすべての必然的な物事も必然的と言われる
のである。

’ (アリストテレス「形而上学」第五卷 第五章
出 隆 訳 岩波文庫 (上) p164-5)

0.0. いわゆる「様相述語」(надо, должен, мочь, etc.) は義務、可能、許容などの義務的deontic意味と、確信、予想などの認識的epistemic意味を表す。本稿ではこれらの意味を可能世界意味論のモデルを援用して記述し、それらが発話の中でどのような文法特徴をもって出現するかを、義務的、認識的の二つの意味の共通性や違いに注目しつつ、ロシア語の事実に焦点を合わせながら考察する。

「様相модальность」「様相的модальный」といった語は様々な言語-文法範疇に対応して用いられる。言語学全体では様相の領域に関わるものとして例えば、断定、疑問、命令などの発話機能(これは直ちにサールの「発語内的行為」の諸カテゴリーを想起させよう¹⁾)、「肯定-否定」の対立、発話内容の現実性または非現実性の程度、現実に対する話者の確信の度合いなどの意味-文法カテゴリーが指摘されている。ロシア語文法では、様相あるいは様相の意味 модальное значениеは「発話の現実に対する関係および伝達内容に対する話者の評価の諸相を表す意味-機能カテゴリー」²⁾と規定され、それらは「客観的様相」「主観的様相」と名付けられる統語論的もしくは非統語論的手段によって表現される。ロシア語規範文法の様相の規定は様々な問題を含んでいると思われるのだが、ここでは様相述語の扱いに關しての現行のアカデミー文法(所謂80年文法)の規定を簡単に示し、若干の考察を本稿末に加えるにとどめたい。

80年文法では「様相」「様相的」という語は4つの意味-文法範疇に対して用いられる。つまり客観的様相объективная модальность, 主観的様相субъективная модальность, 様相(述)語модальные слова, 様相疑問модальный вопросで、このうち様相のカテゴリーの中核をなすのは始めの二つである。客観的様相のカテゴリーは、発言の単位を文たらしめる、つまり語句や単語から区別する必須の要素である述定性предикативностьに含まれる、従ってすべての文に必然的に含まれる要素で、発話を現実性(=時間/時制的定性(временная определенность)もしくは非現実性(=時間/時制的不定性(временная неопределенность))の面に関係付ける'抽象的統語論的

1 Searle J. Speech acts, p24; 邦訳「言語行為」p41.

2 Лингвистический энциклопедический словарь. стр.303. Модальностьの項。

カテゴリー」とされる。一方、主観的様相は音調、語順、挿入語、助詞あるいは成句的表現などによって話者の、発話内容に対する態度が示されるものとされるが、こちらはつまり通常の統語論では処理しきれない（はみ出してしまう）表現手段のゴミ箱的範疇である。

様相述語 *модальные предикаты/ модальные слова* はこの客観-主観的様相の二極化の間であってどちらにも属さず、「可能性、願望、義務性や必然性をその語彙的意味によって表現する手段」とされる。様相述語と二つの様相のカテゴリーとの関係は次のように示される：様相述語を含む文は、一方でこれらの述語の表す意味（義務性、願望など）に近い意味の客観的様相を表す文と体系的、形式的、また意味論的に相関関係にあり (ex. Ты не должен ходить сюда! と Не ходи сюда!), 他方で様相述語の語彙的意味に多くの場合、話者の個人的、主観的関係の意味が含まれるゆえにこれらの述語は主観的様相の表現と接近する³。

このように、様相述語は様相表現の中で独特の立場を占めるが、では実際にこれらの様相述語はどういった文法-意味論的実体を持つのだろうか。この問題を考えるために本稿では次のことがらを議論の内容とする：

1. 様相論理学に基づいて様相述語の表す必然性と可能性の意味を関連づける。
2. ヒンティカの可能世界意味論を援用しながら様相述語の意味を規定し、同時に義務的意味、認識的意味の特徴を示す。また、様相述語を含む文と現実の事象との関係を検討する。
3. 必然/可能の意味と否定の関係を中心に、様相述語の発話機能を明かにする。

1. 必然・可能の論理学的関係

1.1 論理学では命題についての判断に次の4つの形式を与える：

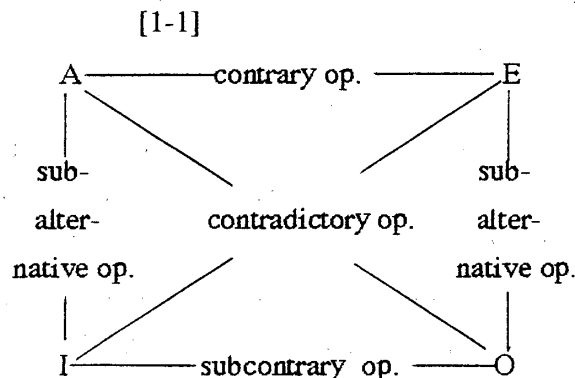
A：全称肯定 「すべてのxはQである」 $\forall x Q$

E：全称否定 「すべてのxはQでない」 $\forall \neg x Q$

I：特称肯定 「あるxはQである」 $\exists x Q$

O：特称否定 「あるxはQでない」 $\exists \neg x Q$

4つの判断は相互に関係を持ち、その関係は次の[1-1]のように表現される：



3 Русская грамматика, т. II. § 2190.

A-O, E-I: 矛盾対当 contradictory opposition: 排中律 excluded middleの関係で一方が真の時他方は必ず偽。

A-E: 反対対当 contrary opposition: 排反的選言。一方が偽の時他方の真偽は不明 (i.e. Aが真の時 Eは偽、しかしAが偽の時Eは真または偽。逆の場合も同じ)。

I-O: 小反対subcontrary opposition 非排反的選言。ともに真でありうるがともに偽になることはない。一方が真の時の他方の真偽は不明。

A-I, E-O: 大小対当 subalternative opposition: IはAの、OはEの部分についての判断。全体が真なら部分も真、部分が偽なら全体も偽。それ以外の場合、真偽は不明。従ってAはIを、EはOを論理的に帰結entailする。

[I-I]で示されるようにA-E, I-Oの横の関係が肯定-否定の質的(意味的)対立を表すのに対し、縦の関係は量的な差、全体と部分の関係を示す。ここで注意すべきは、論理的判断の意味とその日常言語の等価表現の意味即ち語用論的意味の違いで、論理的判断ではA(全称肯定)が真である範囲で、任意のものを取り上げてI(特称命題)を主張することは常に正しく(「総てのXはPである」ことが真ならば、「あるXはPである」ことは常に真である)、否定の場合も同様である(「総てのXはPであるということが真でない」ならば「あるXはPであるということは真でない」は常に正しい)。つまりIはAと、OはEと両立する(compatible/tolerable)。また、I: Some men are mortal. と主張する場合、"Some X"の表す論理的意味は、「死すべきものであるということが真であるような、少なくとも一つのX(人間)が存在する」である。これは「総ての人間は死すべきものである」という命題が真であれば常に真で、IとAの主張は両立可能となる。ところが、同じI表現の語用論的意味は、「(総ての人間のなかで)死すべき人間がいる」で、この主張は同時に「死すべきではない人間」の存在(スクエアで言えば特称否定 O: Not all men are mortal. ある人間は死すべきものでない)を含意し、全称肯定: 「総ての人間は死すべきものである」とは相いれない。この小反対(I-O)の語用論的両立可能性は様相述語の機能を考えるうえで重要となる。以上のことを了解したうえで、上記の判断のスクエアを具体的な言語の分析に援用する。

1.2 スラヴ語ならびに多くの言語では、様相述語によって義務的deontic意味(以下△と略記)と認識的epistemic意味(Eと略記)が表される⁴。

この二つの意味のうち、Eは認識者の事象に対する信念や疑惑、予測などを表す。この意味の述語は我々が属する現実世界に生起する事象を問題とするのではなく、話者もしくはある世界の認識者の知識や信念に基づく世界、つまり可能世界を作りだす。そこでEに関してこれを可能世界意味論の枠内で論じることには異論は生じそうにない。一方、△は発話においては(日常的意味の)義務、許可、許容、(否定の)義務、禁止、不必要などとして理解されるが、後述するようにこの意味

4 勿論、様相述語の表す必然性や可能性が話者の主観に依存しない、より本来的な意味(論理学で言うalethicな「必然性」や「可能性」に近い意味)を表す場合がある。たとえば: Через час должен начаться рассвет. これは特に、自然現象や社会現象において、必然的にあることが生起することが明らかな場合に現われる用法であるが、こうした場合も可能世界の帰属する主体を現実の法則、あるいは社会的認識一般と捉えれば認識的意味の一つのタイプと捉えられよう。

はしばしば、現実が生じる（生じた）事象に関する義務性や可能性の意味を表す（ex. Вчера мы должны были...）。従ってもし、可能世界を「現実（反映論で言うような、我々の意識に反映された唯物論的現実）」に対立する「非現実世界」と解釈し、そのような世界に関する言及だけを「様相」述語の表現領域であると見做せば、 Δ は部分的にしか可能世界＝非現実と関わらないことになり、Eと平行的に可能世界意味論の中で論じることには反論が生じそうである。この問題は2.1.2で改めて言及することとし、まず様相述語によって表される Δ とEの二つの意味を平行的に可能世界意味論の枠で特徴付けることから始めよう。

可能世界を問題とする様相論理学では一般命題Pに対し様相演算子を付加して「必然にP ($\Box P$)」「可能にP ($\Diamond P$)」という判断が設定される。今、ある可能世界を π 、その集合を Π ($\pi \in \Pi$) とすると、これはそれぞれ：

01A) $\Box P$: 総ての可能世界においてPである : $\forall \pi (P)$

01B) $\Diamond P$: ある可能世界においてPである : $\exists \pi (P)$

また、それぞれの否定は

01C) $\neg \Box P = \Diamond \neg P$: 少なくとも一つの可能世界においてPでない :

$\neg \forall \pi (P) = \exists \neg \pi (P)$

01D) $\neg \Diamond P = \Box \neg P$: 総ての可能世界においてPでない :

$\neg \exists \pi (P) = \forall \neg \pi (P)$

様相論理学で言う「必然」「可能」の判断はそれぞれ、「あらゆる」もしくは「少なくとも一つの」論理的可能世界で命題Pが成立するか否かを問う。ここでは次の法則が成立する：

$\Box P \supset P$ (総ての可能世界で必然にPなら現実においてもP)

$P \supset \Diamond P$ (現実においてPなら少なくともある一つの可能世界でP)

以下に論じる日常言語の様相意味論ではこの法則は常に成立しない。このことを除けば、様相論理の記述形式を様相述語の意味論に適用することができる。

今、可能世界の主体（その可能世界が帰属する主体。これについては2.1.1.で更に言及）を「認識者」と呼ぶと、様相述語によって表される Δ 、Eはそれぞれ上記の論理式01A-D)になぞらえて：

01a) 「必然にp ($\Box p$)」は

Δ : 所与の関係において想定される総ての状況で「Pである」が必要（義務）

E : 認識者において想定される総ての状況で「Pである」が確実。

01b) 「可能にp ($\Diamond p$)」は

Δ : 所与の関係においてが想定される総ての状況のなかで「Pである」が許される（可能な）場合が少なくとも一つある

E : 認識者において想定される総ての状況の中で「Pである」が起こりうる状況が少なくとも一つある。

また、

01c) 否定的可能 ($\Diamond \neg p$)は

Δ : 所与の関係において想定される総ての状況のなかで「pでない」ことが可

能な（「Pでなくてよい」）状況が少なくとも一つある

E：認識者の確信において想定される総ての状況の中で「Pでない」状況が少なくとも一つある。

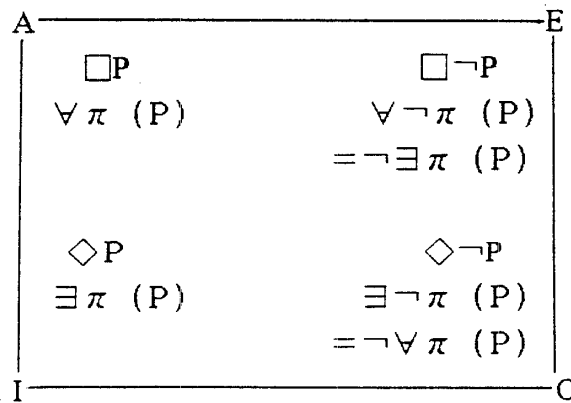
Old) 否定的必然 ($\Box \neg P$) は

Δ ：所与の関係におけるいかなる状況でも「Pであること」が許容されない

E：認識者の確信において想定される総ての状況で「Pであること」がないとなる。

以上の関係を判断のスクエアで示せば次の[1-2]となる：

[1-2] 様相述語の論理的関係



2. 可能世界意味論と様相述語の意味

2.0.0. 様相述語として我々は可能や義務、必然性の意味を表す一連の述語を考える。これらの様相述語は、それ自体は具体的な行為や事象を表さず、文に様相の意味のみを与え、これと統語論的に結びつく他の手段（動詞不定形、補文など）によって行為／事象の意味が表される、という特性によって範疇化される⁵。そうは言っても様相述語というとき、そこに含まれる語彙の範囲をどこまで広げるか（あるいは狭めるか）は一つの問題であろう。

必然性、義務性や可能性は幾つかの表現形式によって実現される（例えば、動詞の法のカテゴリー、質問や依頼の表現、「発語内動詞」、所謂「主観的様相」など）。が、今問題とするのは語彙の意味によって必然性、義務、可能性などの意味を表現するものである。ここに含まれるのはロシア語ではдолжен, обязан, надо, необходимо, нужно, нельзя, можно, мочьなど（なお、これらの述語と並んで意向、希望を表す述語（хотеть, желать）も様相述語のカテゴリーに含まれる。意向、希望の様相も以下に論じる可能世界意味論の領域に関わるが、ここでの考察ではこうした意向や願望を表す様相については検討の範囲外とする）、同じような意味を表す述語はチェコ語ではmuset, moci, smět, mít, je nutno, třeba, lze, možnoなど、セルビア・クロアチア語ではmorati, trebati, sm(jeti), moćiなどとなる。

だがこれら以外にも Δ やEの意味を近似的に表現する語彙的手段はあり、それらのあるものは様相述語あるいはそれに準じるものとして扱われ（たとえばロシア語のследует, приходитсяなど）またある語は様相表現に近い意味を表しながら様相

5 Русская Грамматика. т. II. § 2190. (3)

述語のカテゴリーには分類されない。では我々のいう様相述語と、それに近い意味を表す語彙の間にはどういった関係があるだろうか。

2.0.1. 様相述語の表すEの意味は、語られる事象に対する話者の確信の程度（「...に違いない」「かもしれない」「はずがない」）を表す。ところでこうした話者の発話内容に対する確信の諸相は、「確信する」「疑う」などの意味を表す命題態度動詞propositional attitude verbsによって端的に示される。命題態度動詞も、我々の言う（あるいはロシア文法で言う）様相述語も、判断主体の認識を表し可能世界文脈を形成し、実際に様相論理のなかで「様相述語」と呼ばれるものはしばしば命題態度動詞である。このようにEを表す様相述語と命題態度動詞は意味上近接性を持つわけだが、この共通性にも関わらず、この二者を認識の主体と発話者との関係、述語の発話における機能という点から見ると、明らかな相異がある。

ロシア文法で言う様相述語のEは常にその述語が含まれる文の発話者の信念、認識と結びつき、それ以外の者の認識を表すことはない（これについてはまた2.1.1で言及）。これはバンヴェニストのいう「主体性が言葉の行使そのものに内属している」⁶状況を端的に示すといえよう。これに対し命題態度動詞は総ての人称（話者、聞き手、第三者）と結びつく。バンヴェニストは遂行的発話と人称との関係に関して、遂行的動詞が遂行的となる、即ちその行使そのものが一つの行為、態度の表明となるのは一人称（かつ現在）の場合のみであって、それ以外の人称に用いられた遂行的動詞は行為の記述、描写となると指摘し、ここに語る主体としての「私」＝一人称の特異性を見出したのであった⁷が、これと同じように信念文脈や可能世界文脈においても、命題態度動詞が発話者つまり一人称において使用された場合にのみその行使が主語の信念、態度を表す行為となる。そこで、命題態度動詞が確かに認識的、つまり様相述語で示されるEに近似的といえるのは、主語が一人称の場合：「私は...と信じる'Я верую / уверен, что...」のみであって、発話者以外の主語の信念：「かれは...と信じる'Он верует / уверен, что...」は発話全体のなかでは語る主体である一人称の「私」による、ある人物の行為に関する一つの断定もしくは記述、ロシアの規範文法的立場から言えば、ある行為者についての「現実」的行為の言明となるのである。

勿論、以上のことと、命題態度動詞がその主語が何（誰）であれ、それによって導かれる文脈に可能世界を作りだす述語機能をもつことは別のレベルの話である。

2.0.2. さて、△に関して様相述語の範囲を考える場合には、ある種の意味特徴を持った一群の語彙、つまりそれ自体が単なる様相（義務、可能など）の意味以上の語彙的意味（具体的な行為や事象をあらわす力）をもち、義務性や可能性の意味がそこに内属するもの（例えばдолженに対しприказан命じられた、нельзяに対しзапрещено 禁じられた。あるいは可能のмочьに対し知識や技能レベルでの「能力」を表すуметь）が問題となろう。これらは、本節2.0.0の冒頭に示した様相述語の定義からすれば、基本的な様相述語のカテゴリーには含まれない、あるいは、より

6 バンヴェニスト「言葉における主体性について」邦訳p248

7 バンヴェニスト 上掲書p248-

拡大した範囲での様相述語と見做されるべきであろう。これらの義務性や可能性に関わる語彙の、様相述語と異なる点はもちろん、前者がただ△の意味しか表さず様相述語のようにEを表すことがないという事実である：

△(P)：

Он может решать такие задачи. 彼ならこんな問題は解ける。

Он умеет решать такие задачи. 彼はこうした問題の解き方を知っている。

に対して

E(P)：

Он может умереть. 彼は死ぬかも知れない。

*Он умеет умереть.

мочь-уметь (および可能性を表すその他の幾つかの語彙) の関係は独立した問題として取り上げる価値がある⁸が、一つの際だった違いは、等しく◇を表すとしてもмочьがその反対否定と両立可能であるのに対し、уметьはそうした反対否定の余地を与えないことであろう：

Он может приехать, но может не приехать.

彼は来てもよいが来なくてもよい。

*Он умеет плавать, но умеет не плавать.

かれは泳げるが泳げないこともできる。

様相述語の範囲を厳密に設定することは困難であるし、それは様相述語の定義をいかに定めるかにかかっていよう。ここでは範囲限定の問題には深入りせず、上述した点を考慮しつつ、通常「様相述語」として最も普通に用いられる語を様相述語と了解し、検討の対象とする。

2.1.0. 日常言語に現われる△やEの意味は、発話機能と結び付けて、つまり発話者、語られる事象の内容や時制、行為の実行者などの要素を考慮して考える必要がある。例えば、Benešová(73)は義務、可能、意志などの様相表現のタイプを、行為者původce dějeとこれらの様相の意味を生じさせる主体＝様相の発生者původce modalityの二者の関係によって規定している⁹。こうした点について我々も目を向けていくのだが、その前に△、Eの意味をあわせて可能世界意味論の記述モデルを用いて今一度規定し、ここから自然言語における様相述語の意味の諸関係への考察に進もうと思う。

可能世界モデルとしてはモンタギューのモデルが有名だが、ここではヒンティカの記述法を援用する。以下に援用するヒンティカの可能世界意味論は実は、命題態度動詞の作る信念文脈における指示の問題を主眼とし、可能世界と現実のあいだで表現の意味とその対象—フレーゲの「意義Sinn」と「意味Bedeutung」—の関係はどう調整するかに関心があった。一方、今我々が問題としようとするのは個体の指示表現と対象の関係ではなく、可能世界の中の事象と現実の全体的関係並びにそれを作り出す様相述語の機能である。だがこの違いにも関わらず、命題態度動詞の

⁸ мочь, смочь, уметь, суметьの様相、体との結合を扱った最近の研究にFielder G., Aspect and lexical semantics. Russian verbs of Ability. SEEJ 1990. がある。

⁹ Benešová. E., K sémantičké klasifikaci českých modálních sloves. Otázky slovanské syntaxe. III. str.217.

場合のモデルは様相述語の機能を形式化するうえでも有効であると思われる。

2.1.1 ヒンティカ (69) の「命題態度の意味論 (以下SPAと略記)」¹⁰では可能世界と命題態度の関係は次のように定められる：

ある人物 (S) に命題態度を帰属させることは、総ての可能世界を、話題とされる命題態度と協調する可能世界 (possible worlds which are in accordance with the attitude in question) と、両立しない世界 (those which are incompatible with it) とに二分することである。ここから通常の信念文脈：

Bs(P) 「SはPと信じる」は「Sの信念と両立する総ての可能世界でPである」

\neg Bs(P) 「SはPと信じない」は「Sの信念と両立する少なくとも一つの可能世界でPでない」と解釈される。

可能世界は次のような構造を持つ：

Ω ：可能世界の集合 = 全可能世界 ("a set of possible worlds" SPA, p151)

μ ：ある可能世界 $\mu \in \Omega$

つまり Ω はある一つの μ に対する代替世界alternativsのセット。

μ_0 ：可能世界が帰属する主体が属する特定世界 (多くの場合現実世界)

$I(\mu)$ ：可能世界 μ を構成する個体項

次に代替関数 Φ が設定される (SPA, p152)。この関数はある命題態度を取る主体 (我々の設定では「可能世界の認識者」) と、一つの可能世界 μ に対し、 μ の代替であるような様々な可能世界を結び付ける二項関数として定義される。そこで前述のBs(P) は

「 $\Phi_B(S, \mu)$ の総てのメンバーにおいて p が真かつその場合に限り μ で真である」と解釈される。

今、この関数を利用し、信念文脈Bに替えて必然様相 \square によって形成される文脈に対する可能世界の代替の割り当てを $\Phi\square(S, \mu)$ 、可能文脈 \diamond によって形成される文脈に対する可能世界の代替の割り当てを $\Phi\diamond(S, \mu)$ としよう。また、 Δ 、Eそれぞれの場合の認識主体を $S\delta$ 、 $S\epsilon$ としよう。可能世界の認識主体は、SPAでは命題態度述語によって形成される文脈の主語である。我々はここで、このモデルを書き替え、可能世界の認識主体を以下のように規定しておこう：

ある可能世界はその可能世界が帰属する主体と結び付けられる。可能世界が帰属する主体とは、可能世界を作りだし、認識する主体である。Eではこれはそのまま、可能世界の認識者、ある事象や行為に関して必然性 (「に違いない」) や可能性 (「かもしれない」) を判断する主体である。一般にこのような認識主体は話者 (S_0) か、話者以外 (S_1) のいずれかであるが、2.0.1.に指摘したように、様相述語で示されるEの主体は常に話者 S_0 である。これに対して S_1 が可能世界の認識者であることを表すためには、可能世界を S_1 を主語とする引用文、あるいは信念文脈に埋め込むことが必要となる。

即ち、 $\Phi(S\epsilon, \mu)$ において述語が様相述語であれば常に

$S\epsilon = S_0$

¹⁰ Hintikka J., Semantics for propositional attitudes. in: Linsky ed. Reference and modality. pp145-167.

Петя должен быть очень занят. Пётяはととても忙しいに違いない。

(→ Я уверен, что Петя очень занят.)

Петя может опаздать. Пётяは遅れるかも知れない

(→ Я считаю возможным, что Петя опаздает.)

これに対し、 $S \varepsilon = S 1 (\neq S 0)$ であるためには

Иван думает, что Петя должен быть очень занят.

По его мнению, Петя может опаздать.

あるいは

Иван сказал, что Петя должен быть очень занят.

とする必要がある。

一方 Δ において可能世界の認識者 $S \delta$ は、可能世界(あるいはその集合)を作り出す主体、実際には義務や可能の意味の発生源、必然(必要、義務)や可能の意味を与える主体と規定できる。また、SPAでは可能世界を構成要素 $I(\mu) \in \mu$ の集合からなると規定したが、ここで特に $I(\mu)$ を、 μ に属し行為を実現する主体と限定しておこう。すると Δ においては

$S \delta = I(\mu)$

$S \delta \neq I(\mu)$

の区別を得る。これは2.1.0に言及したBenešováの、行為者původce děje(PD)と、様相の発生者původce modality(PM)の一致・不一致の二つのケース($PM = PD :: PM \neq PD$)に対応する。 $S \delta$ と $I(\mu)$ が一致する場合、世界 μ の認識者は同時に行為者自身であり、彼自身の必然・必要性、可能性に基づいて可能世界が形成される。一方 $S \delta$ と $I(\mu)$ が一致しなければ μ の形成は行為者 $I(\mu)$ 以外の第三者、あるいは社会的要請、外的必然性などに起因する。この区別を設定することは Δ の語用論的实现を考えるうえでは有効である。というのも実際この二つの場合でことなる表現手段が用いられる事があるからで、例えばロシア語では

$\Phi \square (S \delta, \mu 0)$ で $S \delta = I(\mu)$ なら должен, надо, нужно, необходимоなどが使用される:

Мне надо поговорить с тобой. Ему надо купить тетрадь.

Я должен немножко отдохнуть.

России надо извлечь серьезные уроки из перестройки. Прежде всего, у нее не должно быть двух политик: одна «на вынос», другая - для домашнего потребления. (МН, №3. 19.01.1992)

ロシアはベレストロイカから重要な教訓を得なければならない。何よりも二つの政治があってはならないのだ、一つは「テイクアウト」用、今一つは国内の消費用といったような。一方 $S \delta \neq I(\mu)$ ならば долженの他に обязан, вынужденなどが使用される:

Мы были вынуждены ждать целый день. 私達は一日中待たされた。

Большинство жителей патриархального Таджикистана не вникают в различия между партиями, считая, что власть, какая бы ни была, должна накормить народ. (МН, №4. 26.01.1992)

昔ながらのタジキスタンの住民の大部分は政党の違いなど深く考えず、政府はそれがどのようなものであれ、民衆を養わなければならないと考えている。

2.1.2. この節では、 Δ の意味と「現実」との関係について考察したいと思う。1.2.で短く言及したように、 E の可能世界 μ は認識者＝話者の信念の中に生じる世界($\neq \mu_0$)で、たしかに「非現実」という意味での「可能世界」と呼べるが、 Δ の問題とする事象は現実 μ_0 の中の事象としばしば一致する：

Утром, когда еще все спят, я должен был приготовить мастерам самовар.
(Горький)

朝、皆がまだ眠っているときに私は親方たちにお茶を用意しなければならなかった。さて、ではこのことから、 Δ が形成する文は現実についての記述で、(「非現実」という意味での)様相文脈ではない、従って Δ の機能は「非現実性」という意味特徴によって一律的に論じるべきではない、と主張することは正当だろうか。

また例えば、Золотова(73)は

Он может работать.あるいはОн должен работать.

などは'Он работает.'と等しく現実の事実について語っているもので、может、долженどが非現実の意味を表すと考えるのは間違いだと主張する。つまりこれらの直接法で語られる事柄は総て「客観的様相」の中の非現実の様相：

Он мог бы работать 彼は働くこともできる／できた

Он должен был бы работать. 彼は働かなければならないかもしれない

と対立し、一方、Он может работать / Он должен работатьとОн работает.の違いは、後者が主体とその行為の間の現実の結び付きを表すのに対し、前者が主体と、彼の行為に対する様相関係の現実の結び付きを表す、としている¹¹。

だが、このような Δ と現実／非現実との関係の捉え方は様相述語の意味の本質を適切に捉えていると言えるだろうか。

上記の二つの疑問に対し我々は次の2.2節でこれらの主張の本質的な誤解を指摘し、そのうえで Δ を含む発話が現実に属すると見做されるのは何ゆえ、また、どういった場合にかを明かにしたいと思う。

2.2.0. 以下ではまず上記第二の疑問に対する我々の立場を示し、ついで第一に掲げた疑問に関連して、 Δ の意味と現実との関わりを検討していきたい。

2.2.1. ここで様相述語を含む発話全体が属する世界と様相述語が形成する世界の関係を把握しておく必要がある。

先のЗолотоваの指摘、つまり義務や可能の意味は「主体と、彼の行為に対する様相関係の現実の結び付きを表す」という見解は明かに、ロシア規範文法の「客観的様相」対「主観的様相」の概念に依拠しているのだが、これに対しては次のことを指摘すべきであろう：様相述語を含む文では二つの層の現実に対する関連性が存在する。一つは述語自体の表す義務や可能の意味が現実(法のカテゴリーでいえば直接法で表される領域)に属するかどうかということ、今一つは様相述語を含む文脈で語られる事象が現実と一致するかどうかということ、この二つの、現実に対

¹¹ Золотова Г.А., Модальность в системе предикативных категорий. в *Отázky slovanské syntaxe*. str.96.

する関係性は同一視されてはならない。確かに「彼は...と信じる」「我々は見なければならぬ」において彼が信じる態度や、われわれの見る必要性そのものは直接法で語られるかぎり「現実」に属し、こうした述語は総て上掲のЗолотова流の解釈では一義的に「主体とその述語の表す様相の意味との現実の結び付きを表す」ことになる。

だが、様相述語や命題態度述語など、世界を作りだす (world creating) 述語では、これらの述語の意味が属する世界と述語によって作りだされる世界は同じ現実もしくは非現実の平面に連続的に並んでいるわけではない。様相述語、あるいは命題態度動詞によって作られる文脈の中で語られる事柄は、基本的にその述語によって作られた世界に属する。これが全体として発話事象を含む現実と一致するのは「偶然」にであって「必然」にではない。つまり様相述語の意味それ自体は現実にも属すとも、それと共に語られる事象について、それが現実にも属するか非現実にも属するかを決定する力を持たない。様相述語の意味を問う場合、この後者の性質こそ本質的問題であり、様相述語と其中で語られる事象の関係にこそ注目されなければならない。

2.2.2. それでも2.1.2の第一の疑問として掲げたように、 Δ を含む発話が全体として様相世界ではなく、現実にも属するという主張には確からしさがある。これは二つの事情、一つは様相述語によって表される義務性や必然性が行為者以外の現実的な要因によって (たとえば他者からの命令や、周囲の状況からの強制的な必然性や可能性、社会的規範、ノルマ、社会道徳など) 生じる場合が多くあること、更に今一つは様相述語を含む文脈で語られる事柄が現実と一致する場合が確かにあることと関連する。

では、 Δ を可能世界意味論の枠内で記述するという立場から、この二つの事情にどう対処したらよいか。

まず第一に、 Δ の義務性/必然性、可能性が他者からの命令、周囲の状況からの強制的な必然性や可能性、社会的規範、ノルマ、社会道徳などの外的現実的要因に由来する場合の扱いである。

201) Я должен / обязан ехать в командировку, хотя ехать мне не хочется.
(Метс, Практическая грамматика. стр.160)

行きたくはないのだが、私は出張しなければならない。

202) Я опоздал на поезд и вынужден был ночевать на вокзале.
(Метс, op.cit. стр.162)

私は列車に遅れ、駅で夜明かしすることを余儀なくされた。

203) С детства надо воспитывать детей в труде.

子供の頃から子供は苦勞させて育てなくてはならない。

確かにこれらの義務や必然の意味は、周囲の状況や社会的規範を表しているために、 $S \delta$ が $I(x)$ である場合より強い、現実についての記述の性格を持つ。それでもこれを可能世界の意味論のなかで記述することは可能である。つまり、命令や許可を与える人物、ある特定の状況、あるいは社会的規範や道徳の体系などを可能世界の

創造者=その認識者 S_0 と考えると、可能世界の集合 Ω はそれぞれの条件にあったすべての「理想世界」¹²となる。そこで、 S_0 が誰あるいは何であるかに関わらず、□の意味は総ての可能世界が S_0 の与える条件と両立可能であることであり、◇の意味は S_0 の与える条件と両立可能な世界があることと解釈できる。この処理は単なる形式上のものだが、これによってこうした場合の Δ を特別扱いしなければならない論理上の理由は除かれることになる。

さて、先に指摘した第二の点は、様相述語を含む文と含まない文で語られる内容が実質的に一致する場合、ということであった。この問題は様相述語の意味を考えるうえで興味深い、幾つかの現象を含んでいる。

先に、様相述語を含む文脈で語られる事柄が現実と一致するのは「偶然に」であるとしたが、確かに様相述語が作り出す可能世界の中で語られる事柄が偶然に現実と一致すれば、我々は実質、現実世界を話題としていることになり、その時様相述語の役割は可能世界の創造よりもっと別な所に求められなければならない。ではどういった場合にこの一致は生じるのか。

ここでは発話時点と語られる事象の時制関係が考慮されなければならないのだが、時制と様相述語の関係を検討する際まず、次のことを確認しておこう。 Δ もEも、形式上は総ての時称形態と共起する：

現在時制

Он читает книгу.

Книга читается им.

Он должен читать книгу.

Книга должна читаться им.

未来時制

Он будет читать книгу.

Книга будет читаться им.

Он должен будет читать книгу.

Книга должна будет читаться им.

過去時制

Он читал книгу.

Книга читалась им.

Он должен был читать книгу.

Книга должна была читаться им.

時制に関して Δ がEと異なるのは、 Δ が語られる事象と共に発話の時間軸の中を移動する、ハリディの言い方を用いれば「時制のシステムに完全に従属する (subject to the full tense system)」¹³のに対し、Eの場合は時称の文法形式と両立可能でも、時制は語られる事象に付随するもので、Eの意味自体は $S_\epsilon (= S_0)$ の認識の時点 (=発話の時点) ともつばら結びつく、つまりEは発話者 S_0 (一人称) と、その発話行為に直結する (話者のhic et nuncを示す) 話者直示的カテゴリーであり、語られる事象の生起する時間軸の外にある、という点である。

さて、 Δ は事象の生起する時間軸に従属するが、では様相述語を含む文脈◇Pあるいは□Pが様相述語を含まない発話Pと実質的に等価となるのはどういった場合だろうか。

事象Pが現実であるという場合、Pは過去あるいは現在実現された/ている事

12 オールウッド、アンダソン、ダール「日常言語の論理学」p121.

13 Halliday M.A.K., Modality and modulation in English. in:Kress (ed) Selected Papers. p201.

象、将来起こる予定の事柄、のいずれかであろう。この中で、将来起こる予定の事柄は実際に生起していない以上あくまでも潜在的現実であって、実現中の、あるいは実現された事象とは現実性のレベルにおいて区別されなければならない。こうした未実現の事象について語られる場合には、様相述語を含む文と含まない文で意味の差異が明かに意識される：

204A) Сергей будет читать эту книгу. セルゲイはこの本を読むだろう。

204B) Сергей надо читать / надо будет читать эту книгу.

セルゲイはこの本を読まなければならない／だろう。

様相述語を含む文(204B)はある行為についての現在もしくは将来生じる義務性を表しており、単に予定されている行為の表現である(204A)と区別される。そこでこうした未実現の事象の場合を除外し、

(1) 事象が発話時点と時間的に共起して生起中のこと

(2) 事象が発話に先立つる時点で実現されたこと

の場合について様相述語を含む文脈と含まない文脈の関係を考えよう。

(1) の場合 (1a) 発話時点と同時の現実の現在 (発話と同時に展開する行為) が表される； (1b) 発話時を含む、より広い時間に共起する事象 (習慣、反復、一般事象など) が話題である、のケースに分けられる。

(1a) : 発話時点と同時の現実の現在 (発話と同時に展開する現在) を表す：

実際に働いている人を指して「彼は仕事をしなければならないんだ」というような場合 (Он сейчас на работе; должен работать.), 様相述語を含む文脈 (ex. Он должен работать.) が発話行為と同時に展開する行為を表すといえよう。ここでは様相述語の実質的役割は展開中の事象についての説明、理由づけなどにあると考えられる。

ただし、様相述語を含む文脈が実際に発話と同時に展開中の事象を表すことは実際にはそれほどないように思われる。

205A) Он сейчас работает / на работе. 彼は今、工作中だ。

205B) ≠ Он сейчас должен работать. 彼は今、仕事をしなければならない。

ここで様相述語を含む文(205B)の意味は「今から始めなければならない」「仕事をしているべき (なのにしていない)」か、あるいはΔではなくEの意味 (「工作中に違いない」) であろう。

様相述語を含む発話が現実の行為と一致する一つの際だったケースとして、いわゆる遂行的発話を考えることができる。

オースチンが、発話行為そのものが一つの行為あるいは行為の一部をなすような文を行為遂行的performativeと指摘したことはよく知られている¹⁴。これは、約束、命名、認定や宣言の意味の述語が一人称現在で用いられるときに現われる。ところで様相述語もしばしばこのような遂行的動詞と結びつき、様相述語を含まない遂行的発話と実質的に同じ行為遂行的発話を形成する：

Я могу обещать вам помогать во всем.

私はあらゆることであなたをお助けすると約束できます。

14 Austin J.L., How to do things with words. Oxford:N.Y.1962.

= Обещаю вам помогать во всем.

Надо признать вашу правоту. あなたの正当性を認めなければなりません。

= Признаю вашу правоту.

行為遂行的発話では発語行為それ自体が行為となるのだが、そこにはしばしば主体の行為遂行に対する義務性や可能性の認識が内属する（「約束する」のは、約束できるからするのだし、「認める」のは認めざるを得ないからそうする、というように）。こうした内属的な□や◇の認識があるために、ある種の遂行的動詞の行使は□や◇の意味を明示的に示す様相述語の使用と等価になると考えられる。

ここから更に、遂行的発話と様相述語の関係はその結合の組み合わせの可能性という形で考察を発展できよう。即ち、一つには同じ遂行的動詞が□と◇の述語と結合した場合の意味の違い（Могу обещать... vs. Я должен обещать...）、また一つには□または◇のどちらかの意味としか結合しない遂行的述語の意味論的タイポロジー（たとえば Должен признать... = Признаю... に対し(?) Могу признать...; Надо просить тебя подумать о детях. = Прошу тебя подумать... に対し(?) Могу просить...）の問題がある。こうした問題について検討することは本稿の範囲外であるが、遂行的発話の意味論と合わせて検討されるべき課題であろう¹⁵。

(1b) : 発話時を含む広い時間に共起する事象（習慣、反復、一般事象など）：

206) Каждый день ему надо покупать Тайм.

彼は毎日タイムを買わなければならない。（事実買っている）

(2) 過去に実現された／ていた特定の事象：

207) Утром, когда еще все спят, я должен был приготовить мастерам самовар.

朝皆がまだ眠っているときに私は親方たちにお茶を用意しなければならなかった。

208) Пошёл дождь, и мы не могли идти гулять.

雨になって私達は散歩にできることが出来なかった。

(1b)や(2)の場合、様相文脈Φ(P)と事実Pの間には、Φ(P)とすることによってPが伝えられるという語用論的含意の関係が成立する。ここに様相述語が果たす役割は、何らかの事情によって行為の実現が不可避・必然あるいは可能であった、という、行為の実現（あるいは非実現）の正当化や理由づけなどとなる。

だが、様相述語を含む文脈が過去時制で語られても、常にそれが現実と一致するわけではない。

209) Мы должны были приехать вовремя.

209)の発言が現実と一致するかどうか(...и приехали вовремя)は形式だけからは明かにされない。そこで我々は

(A) 様相述語を含む文脈が現実と一致し、様相述語は実現された行為が外的あるいは内的必要性や可能性によって実現されたことを意味する場合、

(B) 必要性や可能性があつたにも関わらず行為自体は実現されなかった（あるいは実現されたか否か不明である）場合

¹⁵ 様相述語を含む遂行的発話の意味論について英語の場合を扱ったものに Fraser B., Hedged Performatives. Syntax and Semantics Vol.3. pp187-210.がある。

を得る。

ヒンティカの当初の規定に戻れば、可能世界の認識主体にある世界 μ を帰属させることは、総ての可能世界 Ω を μ と両立可能な世界と両立不可能な世界に二分することであった。そこで (A) は

$$21A) \Phi \square (S \delta, \mu) \cap P \mu 0$$

Pは $\Phi \square (S \delta, \mu)$ において真かつ $\mu 0$ (現実)において真
(Ω の総ての世界は $\mu 0$ も含めて μ と両立する)

$$22A) \Phi \diamond (S \delta, \mu) \cap P \mu 0$$

Pは $\Phi \diamond (S \delta, \mu)$ において真かつ $\mu 0$ (現実)において真
($\mu 0$ を含む Ω の少なくとも一つは μ と両立可能)

と記述され、一方 (B) は

$$21B) \Phi \square (S \delta, \mu) \cap \neg P \mu 0$$

Pは $\Phi \square (S \delta, \mu)$ において真かつ $\mu 0$ (現実)において偽
(Ω の総ての世界は μ と両立可能。ただし $\mu 0$ は含まれない)

$$22B) \Phi \diamond (S \delta, \mu) \cap \neg P \mu 0$$

Pは $\Phi \diamond (S \delta, \mu)$ において真かつ $\mu 0$ (現実)において偽
($\mu \in \Omega$ の少なくとも一つは μ と両立可能。かつ $\mu 0$ は含まれない)

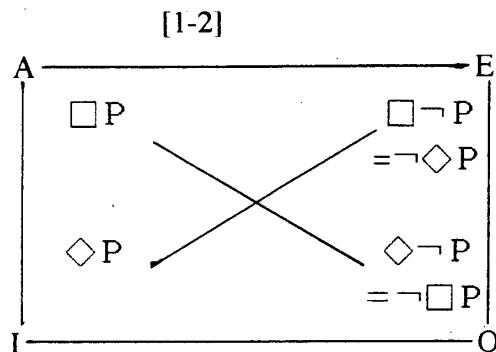
という形式で記述されよう。

様相文脈の現実に対するこの二通りの対応を不定代名詞を含む文の場合にあてはめてみよう。今、ある関係項Xを含む文S例えば：Ты должен был поговорить с X. 「君はXと話をしなければならなかった」という発話を考えよう。これが、誰かと話す必要があったという必然性のみを問題とするなら 'Ты должен был поговорить с кем-нибудь из них.' 「彼らのうちの誰かと話す必要があった」と不定代名詞 кто-нибудьを用いることができる。この場合背後にある事態は更に「誰かと相談する必要があったにも関わらず話さなかった」、「誰かと話す必要があり、結局誰か(X)と相談した」、話者はこの行為がX実現されたかどうか知らない (И поговорил ты с кем-нибудь?) に分岐する。第一の場合は上記21B)に、第二の場合は21A)に該当する。また第三の場合は現実におけるPの真偽性が排除されるので、 $\Phi \square (S \delta, \mu)$ と両立すると断定できない、という意味で21B)に対応すると考えられよう。一方、Xを含む文Sが現実の事象を含意する場合 (上記21A)のケース)、これは過去に実現された特定の行為であるから、Xには特定の項が一義的に決定されて代入されなければならない。こうした状況ではXに不定代名詞кто-нибудьではなくкто-тоが用いられる：ex. Кто-то должен был взять на себя эту обязанность. Но я не знаю кто. 「誰かがこの義務を負わなければならなかった (実際にそうした人物がいた) が、それが誰だか私は知らない」。これは*Кто-нибудь взял на себя эту обязанность. が不可能であることをそのまま透過している¹⁶。

16 こうした様相文脈と不定代名詞の使用、ならびに強調要素などが加わった場合についてはСеливерстова О.Н., Местоимения в языке и речи. сс.68-69. 実際、-нибудь、-то代名詞の使い分けられる状況は様々な要因と関連するので非現実=-нибудь、現実=-тоのような簡単な図式的対応で特徴付けることはできそうにない。

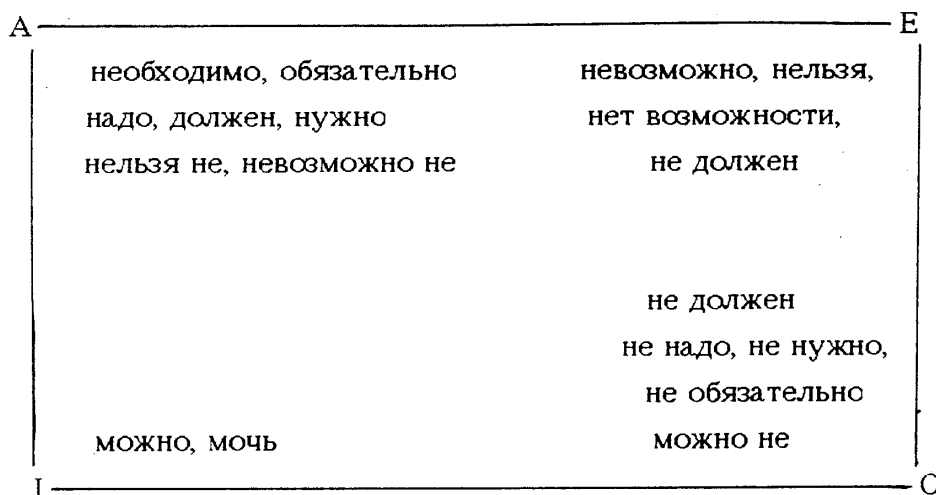
3. 様相の意味と否定の関係；若干の語用論的考察

3.0.0 論理的判断のスクエアを様相述語の関係にあてはめ関係図[1-2]を得た：

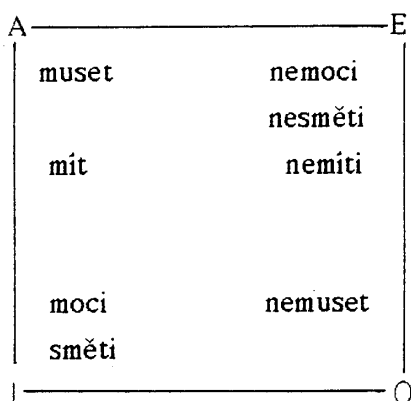


これにロシア語ならびにスラヴ語の様相述語を対応させると次の[3-1]を得る：

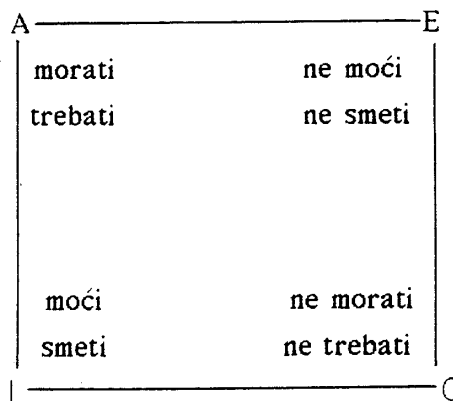
[3-1: ロシア語の様相述語の関係]



[チェコ語の場合]



[セルビア・クロアチア語の場合]



基本的な命題の判断に関するスクエアでは大小関係は論理的帰結の関係であり、 $A \supset I, E \supset O$ であった。当初1-1で指摘したように、論理的な命題関係と日常言語の表す意味は同じではない。様相述語についてもこの事情は同じで、日常語で「可能

だ) (「会議に出席してよい」) という場合、 $\square P$ 「ねばならない」という必然状況 (「会議に出席しなければならない」) に対して両立可能の意味は常に生じない (勿論、両立可能 (Мы можем и должны решить, куда нам идти 「私達はどこへ行くか決められるし、決めなければならない」) な場合もある)。多くの場合、可能の意味が何に由来するものであれそこには小反対の不必要 $\diamond \neg P$ 「しなくてもよい」が含意され、 $\diamond P$ と $\neg P$ の語用論的含意: может P, а и может не P (PであってもPでなくてもよい) が保たれる。

3.1.0. 以下では様相述語と否定の関係に注意を向けたいと思う。命題否定の論理では通常、否定の第一義的な意味は

$\forall X$ の否定は $\neg \forall X = \exists \neg X$

また、

$\exists X$ の否定は $\neg \exists X = \forall \neg X$

のように、矛盾対当に割り当てられる ([1-1]参照)。これを先の $\square P$ と $\diamond P$ の関係にあてはめると、

$\diamond P$ の否定は $\neg \diamond P = \square \neg P$ また $\square P$ の否定は $\neg \square P = \diamond \neg P$ ([1-2])

この関係から Δ では

301A) $\square P$: Суденты должны сдавать экзамены в этом семестре.

学生達は今学期に試験を受けなければならない。

に対し否定

301B) $\diamond \neg P$: Суденты не должны сдавать экзамены в этом семестре.

学生達は今学期に試験を受けなくてよい・必要はない。

[Метс, Практическая грамматика, 164]

また

302A) $\diamond P$: Вы можете брать эту газету.

この新聞をお持ちになっていいですよ。

に対し否定

302B) $\square \neg P$: Вы не можете брать эту газету.

= Вам нельзя брать эту газету. ($S \delta \neq I(X)$)

この新聞を持っていくことは出来ません。

を得る。同じようにチェコ語では

Cz. $\square P$: Petr musel odejít. ペトルはいかなければならなかった。

の否定は

$\diamond \neg P$: Petr nemusel odejít. ペトルはいかなくてよかった。

また

$\diamond P$:

$S \delta = I(x)$ / $S \delta \neq I(x)$: Petr může pracovat.

ペトルは仕事することができる。

$S \delta \neq I(x)$: Petr smí pracovat. ペトルは仕事することが許されている。

の否定はそれぞれ

□¬P :

S δ =I(x)/ S δ ≠I(x) : Petr nemůže pracovat.

ペトルは仕事することができない

S δ ≠I(x) : Petr nesmí pracovat.

ペトルは仕事することが許されていない¹⁷

3.1.1 ところで上述した通常の否定=矛盾否定に対し否定には今一つ、反対否定がある。反対否定は全称肯定∀P(x)に対して全称否定∀¬P(x) (=¬∃P(x))を与え、特称否定∃P(x)に対して特称否定∃¬P(x) (=¬∀P(x))を与える。そこで、△では

303A) □P : Студенты должны сдавать экзамены.

学生達は試験を受けなければならない。

に対し否定

303B) □¬P : Студенты должны не сдавать экзамены.

学生達は試験を受けてはならない。

また

304A) ◇P : Вы можете брать эту газету.

この新聞をお持ちになっていいですよ。

に対し否定

304B) ◇¬P : Вы можете не брать эту газету.

この新聞をお持ちにならなくてもいいですよ。

を得る。これらの例から明らかなように、ロシア語では反対否定は基本的に否定辞の位置によって矛盾否定と区別される：cf. 302B) не можно ≠ 304B) можно не.

ところが様相述語のあるものは矛盾否定と反対否定が同じ統語論的形式をとり解釈上多義性が生じる。その典型がдолжен, надоなどで、не должен, не надоが場合によってдолжен, надоの矛盾否定¬□P = ◇¬P(不必要)、反対否定□¬P (=¬◇P)「てはならない」(とくに不完了体動詞との結合で)の意味を表す：

305) Студенты не должны опаздывать на экзамены.

学生達は試験に遅れてはならない。

(cf. 301B; 303B)

このような否定の場合の統語論的多義性は部分的にしか現われず、この非体系的分布はこうした多義性を許容するдолженやнадоに様相述語全体の中で特別な位置を与えているように思われる。必然の意味を表す述語でも、нужно, обязанなどは述語に対して否定が前置された場合には通常の矛盾否定しか表さない：

Она не обязана быть любезной со всеми.

彼女は必ずしも皆に親切でなければいけないことはない。

≠(?) Она обязана не быть любезной со всеми.

彼女は皆に親切であってはならない。

Не нужно их встречать, они придут сами.

彼らを迎えに行く必要はない。自分たちで来ますよ。(≠ нужно не...)

¹⁷ 以上例はGrepel M., K podstaté modálnosti. v: Otázky slovanské syntaxe, str.31.

またдолженでも E の意味での否定は基本的に反対否定である。つまり：

□P : Он должен быть сейчас на работе.

彼は今、勤務中に違いない。

に対し否定は：

□¬P : Он не должен быть сейчас на работе.

彼は今、勤務中であるはずがない。

ここでは矛盾否定◇¬P「彼は今、勤務中でないかも知れない」の解釈は通常は生じない。この意味を表すには普通は'Он может быть сейчас не на работе.'の形式が取られる¹⁸。なお、Eの否定「筈がない」でне должен と結合するのは完了体と指摘される¹⁹が、これはこうしたEの現われる状況が、将来起こりうるあるいは起こりえない特定の事象についての推測や危惧などを表すことが多いという頻度性と結びついているように思われる。

可能の意味を表すможно, мочьも、同じ否定の形式によって矛盾否定と反対否定の両方の解釈が生じることはない：

Он может не отвечать ≠ Он не может отвечать.

彼は答えなくてよい≠彼は答えることができない。

3.1.2 さて、должен, надоなどの△の否定の二つの解釈は

306A) ◇¬P : Он не должен приехать туда.

= Он может не приехать туда. かれはそこへいかないでよい

306B) □¬ : Студенты не должны опаздывать на занятия.

= Студенты должны не опаздывать на занятия.

学生は授業に遅れてはならない。

であった。ところでロシア語では否定辞の作用域は最大限で文全体（述語に否定辞が前置される場合）、そうでなければ否定辞以降で、通常その焦点（実際に否定される要素）は否定辞の直後の要素となる。これに対する例外は所謂「移動否定」（смещенное отрицание）で、移動否定の特徴は否定辞が否定の焦点の直前ではなく述語の直前に置かれて中立的否定（述語否定による「文否定」）と同じ形式をとり、かつその焦点つまり実際に否定される要素に対照強勢が置かれることであるとされる²⁰。

例えば：Он решил не все задачи. 彼は全部の課題を解いたわけではない。

に対しこれと同義的表現の移動否定として

Он не решил всех задач.

cf. ≠Он не решил ни одной задачи.

となる。

さて、反対否定のне должен(上記306B)の解釈)にもしばしば対照強勢が置かれ、306A)の矛盾否定と区別される事が指摘される²¹：

18 Шатуновский И.Б., Аномалия и отрицание. стр.79-80.

19 例えば Метс, Практическая грамматика русского языка, стр.164.

20 Падучева Е.В., О семантике синтаксиса. стр.155. 移動否定についてはまた Богуславский И.М., Исследования по синтаксической семантике, сс.40-53.

21 Шатуновский, И.Б., Аномалия и отрицание. в: Логический анализ языка. стр.78.

Он не должен уйти!; Это не должно было случиться!

だがこの場合、今述べたような移動否定とは異なり、否定辞の直後の должен に強勢が置かれ、しかも述語は否定の作用域に入らず実際に否定されるのは должен 以下の動詞句の内容となる。ここでの強勢の役割は否定辞の焦点を示すのではなく、 должен の義務性を強調するところにある。このように文の焦点（否定の焦点ではない）が義務性の意味におかれ、否定の作用域に入らない事から、この否定は実質的に должен не... と同じ意味を表すことになる：

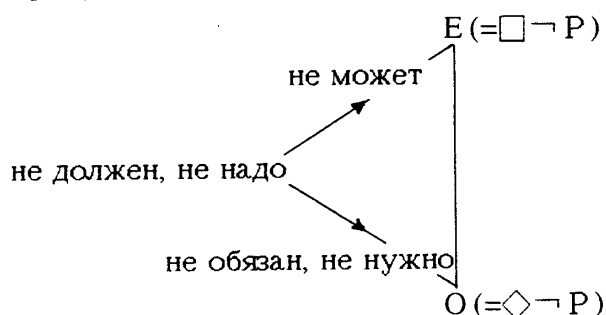
Студенты не должен опаздывать на занятия.

= Студенты должен [не опаздывать на занятия].

こうした事情から、 должен がいわゆる「否定辞繰り上げ」NEG raising, перенесение отрицания を許容する述語の一つとして扱われる。

ロシア語における否定辞繰り上げについては既に別稿で論じているので²²ここではこの問題に立ち入らず、 не должен, не надо に端的に二つの解釈が生じることから、これらの述語の特徴を次のように述べておこう：否定の判断の縦軸（[3-1]図のE-O）を、必然様相に対する欠如的否定：「必然性がないこと нет необходимости）」という意味のスケールと考えると、 не должен, не надо の表しうる意味の領域はその両極（ $\square \neg P$ から $\diamond \neg P$ まで）の間全体に対応する（下図[3-2]）。最も強い意味をとれば必然の禁止 $\square \neg P$ となり、最も弱い意味をとれば不必要 $\diamond \neg P$ となる。 не должен, не надо の表す 'нет необходимости' の意味がスケールのどちらの極にちかづくかは発話の状況如何である。問題とされる行為が話者の意図、あるいは状況の要請に反して実現される懸念がある、あるいは実現されてしまったなどの事情が発話の前提としてあると、先に指摘したような対照強制を持つ 'Он не должен уйти!; 'Это не должно было случиться! ...' 「べきでない／なかった」のような場合が起こる²³。

[3-2] не должен, не надо の意味領域



3.2. 複数の否定辞を含む場合。

次に、文が複数の（通常は二つの）否定を含む場合を考えよう。論理式から言えば二重否定は肯定と等価である： $\neg(\neg P) = P$ 。発話においても二重否定の知的

22 三谷恵子「ロシア語の-нибудь, -тоタイプの不定代名詞について」ロシア語研究 (木二会) 1991. №4. 56-89.

23 Шатуновский, op.cit. 78.

意味は肯定と等しいが、その含意は多くの場合異なるとされる ("не не говорить" ≠ "говорить")。

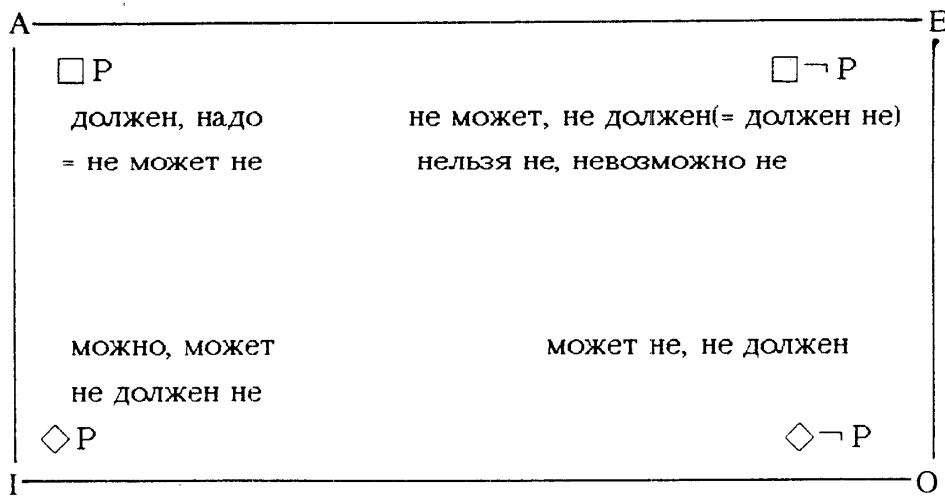
さて、様相述語を含む文に現われる二重否定の表現で以下に検討するのは、上記の $\neg\neg P$ (ex. 'Я не не хочу, но не могу.' 望まぬのではないが、出来ないのです [Толстой. (80Г, 410/411)]) タイプでなく、 $\neg\diamond\neg P$ 、 $\neg\square\neg P$ のように否定の一つは様相述語に、今一つは動詞句の不定形に付加されるタイプである。

論理式では $\square P \equiv \neg\diamond\neg P$ 、 $\diamond P \equiv \neg\square\neg P$ であるから、

должен, надо, необходимо = не может не..., нельзя не...

может = не должен (не надо, необходимо) не...となる。これを再び図式で示せば[3-3]の形になる：

[3-3]



さて、論理式上は $\square P \equiv \neg\diamond\neg P$ 、 $\diamond P \equiv \neg\square\neg P$ であるが、様相述語と否定辞のあらゆる可能な組み合わせの中で実際に用いられるのはどれか、また $\square P$ と $\neg\diamond\neg P$ 、 $\diamond P$ と $\neg\square\neg P$ とが等しい意味を伝えるかどうかが問題であろう。二重否定の形式のなかでロシア語では не может не が比較的よく見かけられる²⁴：

Не каждый летчик может стать космонавтом, но космонавт не может не летать. [Русская грамматика(80), 411]

飛行士が皆宇宙飛行士になれるわけではないが、宇宙飛行士が飛ばないわけにはいかない。

Не думать об этом не мог. [ibid.]

それについて考えないわけにはいかない。

E : Завтра не может не быть затмения солнца.

= Завтра должно быть затмение солнца.

Δ : Не согласиться с этим я не мог.

= Я должен был с этим согласиться.

ロシア語同様チェコ語でも \square : muset Vinf $\Leftrightarrow \neg\diamond\neg$: ne moci ne-Vinf, \diamond : moci Vinf $\Leftrightarrow \neg\square\neg$: ne moset ne-Vinf が論理上可能だが $\square P$ の意味で二重否定 $\neg\diamond\neg P$

24 Бондаренко В.Н., Отрицание как логико-грамматическая категория. стр.129. 二重否定についてはまた Русская грамматика(80), 411.

が用いられるのは基本的に△の意味においてで²⁵、その場合も「文体的に有標 (Nemuhl jsem mu to neřici. 彼に言わずにはいられなかった)」²⁶、またEとしてはあまり用いられない ((?)Tu vraždu nemohl nespáchat Novák. ?殺人をしなかったのがノヴァークである筈がない。→Tu vraždu musel spáchat Novák. 殺人を犯したのはノヴァークに違いない) とされる。また◇Pの意味での二重否定¬□¬Pの使用は△でもEでも極めて稀 (?)Petr nemusel necvičit. △：行なわない必要はなかった/E：?実行しなかったに違いないことはない)、あるいは通常の語感では「受け入れがたい」²⁷とされる。

ここから、二重否定の可能な形式のうち、□に対応する¬◇¬の△の意味：nemoci neはロシア語と同じように常用されるが、それ以外の場合は回避され通常の肯定の形式が使用されるか、使われても何らかの文体的特徴をもってということになる。

一般に□の意味を表す¬◇¬の形式の方が、◇を表す□の二重否定より使用度が高いという指摘がある²⁸。これは確かに、論理的帰結の関係あるいは語用論的含意の関係からいって必然性は可能性よりも強いという、□と◇の意味の強弱と関係するのかもしれない。つまり弱い意味の◇の二重否定によって□が表されるケースは起こりやすいのに対し、わざわざ強い意味の□の二重否定によって弱い意味の◇を表すという現象は起こりにくい、と考えるのである。だが、この問題は様相述語を含む二重否定の効果が否定の弱め、あるいは否定の強調、あるいは何かの含意などのいずれにあるかということともあわせて考察する必要がある。

3.3. 否定疑問の語用論。

本来の論理的判断の関係では、◇と¬◇ (=□¬) は矛盾対当の関係にあり排中律が成立する。排中律では命題の一方が真であれば他方は必ず偽だから肯定と否定の命題が両立することはありえない。ところが、疑問の発話では¬◇と◇が同じ発話の状況で(互換可能に)用いられることが起こる：

Rs. Мне нельзя войти к нему?

⇔ Мне можно к нему?

Cz. Můžeš mi večer zavolat? ⇔ Nemůžeš mi večer zavolat?

[Mluvnice češtiny, III. 289]

肯定疑問と否定疑問の発話に於ける互換性は、様相述語を含む文に限定される現象ではなく、通常の述語否定の形式で生じる特性と言える²⁹：

cf. Ты пойдешь домой? ⇔ Ты не пойдешь домой?

論理的には、質問の発話は断定の発話と異なり「真偽」の判定を含まず、所謂yes-no question (ロシア文法では様相疑問文модальный вопрос)では発話の前提に

25 Koenitz B., Bemerkungen zur Stellung der tschechischen Modalverben im System der Satzmodalität. v Otázky slovanské syntaxe. 206-208.

26 Mluvnice češtiny. (3) Skladba, 289.

27 Koenitz, op.cit; Mluvnice češtiny. ibid.

28 Horn L., A natural history of Negation. p555.

29 Панфилов В.З., Отрицание и его роль в конституировании структуры простого предложения и суждения. ВЯ. 1982, №2. стр.46

あるのは 'P or not P' (上の発話では Ты пойдешь или Ты не пойдешь) という排中律であるされる。それゆえに否定または肯定の解答を得る、という目的からすれば否定・肯定どちらの疑問の形式を選択してもよいことになり、同じ発話状況に現われることになる。

だがいうまでもなく、肯定疑問と否定疑問とは発話の効果において同一ではない。疑問文が様々な発話行為上の効果を含むことは発話行為理論の立場から様々に指摘されているが、特に否定と結びついた質問の形式は、「慣習化された要請 (V вас не найдется чего-нибудь попить? 「何か飲むものはありますか」 → 「何か飲みものを下さい」)」から、相手の行為の確認、和らげられた命令、あるいは強い命令、疑い、聞き手への配慮 (「礼儀正しさ」) などが含意される³⁰。

ロシア語の様相述語に関しては動詞句を形成する不定形の体の選択が実用的問題としてあり、これについては動詞の体の研究の枠内で言及されている。だが様相述語の意味それ自体について詳しく論じたものはロシア語に関するかぎりまだ余りみかけないと思われる。本稿はその辺りを意識して議論を展開したのだが、末尾に付したロシア規範文法における様相のカテゴリーの扱いの問題と合わせて、様相述語の意味論が展開されることを期待したい。

— ロシア語規範文法のなかの「様相」の定義とその文法的実体について —

ここでは80年文法(以下80ПГ)に見られる様相の定義からそこに含まれる問題点を幾つか指摘したい。なお、以下の議論中で問題とされる80ПГの記述箇所は[2190]のように示す。

まず客観的様相は「語られる事柄の現実に対する関係」を表し、現実性реальностьと非現実性ирреальностьにおいて特徴付けられるが、これは同時に時制的定性＝統語論的直接法：；時制的不定性＝統語論的非直接法の対立ともされる。この対立に基づく客観的様相は、文の必須の要素である述定性предикативность、つまり文の文法的あるいは論理的な主語субъектとその述定特徴предикативный признакとの関連性отнесенностьを構成する文法的意味に内属する必須の要素とされる[1894, 1895]。

さて、客観的様相は発話を現実性-非現実性の意味に関して特徴付けるのだが、この「抽象的統語論的カテゴリー」である客観的様相と呼ばれるものの文法的実体は何かと言えば、実際には動詞の形態論的カテゴリーとしての法のカテゴリーにはほかならない。80年文法では客観的様相と動詞の形態論的法のカテゴリーの同一視をさげようとして、ある場合には音調や語彙的手段もまた客観的様相の表現を担う、などとしている[1895, 1896, また関連箇所として2536, 2550など]。がこの試みが失敗であるまさに一つの例として様相述語の扱いが挙げられる。

現実性/非現実性の対立を根拠とする客観的様相の非現実性の意味の中には義務性、願望などが含まれるのだが、客観的様相の表現手段が動詞の形態論的法のカテゴリーにのみ依存するのでなく、音調や語彙的手段も認めるとい主張をそのまま受けとめるならば、では等しく義務性や願望を表す様相述語が客観的様相の表示手段から排除される理由はどこにあるのか、という疑問が生じるのは当然であろう。それに対する解答は、客観的様相が「抽象的統語論的カテゴリー」であるのに対し、様相述語はこれらの意味をそれ自身の語彙的意味において表現する、という相異に見いだす以外に考えられない。ところで実際に80ПГで動詞の形態論的法のカテゴリー以外の客観的様相の表示手段として認められているのは、文あるいは文等価物が述語動詞を明示的に持たない場合に何らかの形で無形の

30 Hills M., The performative force of the interrogative in colloquial russian: from direct to indirect speech acts. SEEJ 1991. vol.35, 1. 98-114. ロシア語の発話行為と結びついた疑問、命令の意味についてもこの論文で言及されている。

述語動詞を補うもの（例えば、Есть/ Идет дождь. に代わる一語文 'Дождь' のゼロ形式の述語。あるいは Дайте/ Если бы чаю! などの客観的様相の表現にかわるイントネーション 'Чаю!' など）である。これらはいずれの場合も文に必須の要素である述定性の構成要素であり、法と時制の統語形態論的範列において展開される性質を内在する（例えば Дождь ならば Была дождь - Будет дождь. - Была бы дождь. - Пусть будет дождь のように [2536]）。というわけで結局「抽象的統語論的カテゴリー」なる客観的様相の実体は、動詞の形態論的法のカテゴリーに属する諸形態、ならびにそれに準じ形態論的法のカテゴリーの空隙を埋める幾つかの法と時制の表現形式（例えば命令の意味の пусть..., 願望の бы, あるいはゼロ形式述語）といった、文法形態上のカテゴリーにはかならず、それゆえに語彙的手段によって義務性、願望などの意味を表す様相述語は客観的様相のカテゴリーからは排除されることになる。

だが他方で、客観的様相は発話内容を現実性/非現実性という意味の面に関係付ける意味カテゴリーとしても規定される [2190]。そこで非現実性 ирреальность の意味に対し義務性、望ましさ、可能性などの様相述語が近い意味を表し（Ты не должен ходить сюда! - Не ходи сюда!）、ある場合には主観的様相の表現手段に近づく（Я хочу...）という、曖昧な記述が現われる結果になる [2190]。

主観的様相の扱いは一層混沌としている。このカテゴリーは音調、特定の語結合や統語構造、成句的表現、挿入語などによって話者の発話内容に対する評価、態度が示されるもの、とされるのだが、80PG も自ら認めるように、このカテゴリーが適応される意味の範囲は非常に広く（あるいは漠然としており）、一義的に定義されない [2190 (2)]。ところで 80PG では、発話の単位である文を、抽象的文法的意味によって形成される文形式と、それに付加される発話の意図、話者の態度からなる、とする立場を基本的にとっている。この考え方は正当であると思われるが、それならば文が発話機能を持つためには、発話者自身の、発話内容に対する評価が何らかの形で常に表現されるということになる。これはもっとも端的には断定、疑問、命令などの文の意味形式に現われると考えられる。だが 80PG ではこうした発話の意味表示のカテゴリーは様相とは切り離して扱われ、主観的様相は表現される場合もあるが表現されない場合もある、などとされてしまう。

こうしたことは、主観的様相のカテゴリーが、発話の意味論全体を視野にいれて規定したのではなく、実際には通常の統語論では処理しきれない表現形式、とくに口話体 разговорная речь で頻繁に使用される表現を一まとめにして文法的ラベルをはるためのゴミ箱カテゴリー、という印象を与える。実際、主観的様相に関しては様々な問題点を指摘することができる。80PG に指定されているような挿入語や成句法などのみを主観的様相の表現と捉えると、例えば Он, безусловно, вернется. 彼はかならず戻るよは主観的様相の表現となるが、Я уверен, что он вернется. は主観的様相の表現とはならない（Падучева Е.В., Между предложением и высказыванием: субъективная модальность и синтаксическая неподчинимость. Rev. Etud. slaves Paris, LXII/1-2. 1990, p305）という議論が成立するのだが、主観的様相:「話者の発話内容に対する態度を表す」という規定からすればこのような主張はそれ自体実に奇妙ではないか。また、例えば「統語論的成句法 синтаксические фразеологизмы [2193] に指摘されている Праздник не в праздник 「休日が休日じゃありゃしない」が主観的様相の表現とすると、同じ表現が第三者を主語とした場合: Для него /Ему праздник не в праздник. は一体どのような様相を持つのだろうか？

様相は発話者と発話行為自体、それに発話内容とそこに参与する項の関係性を全体として問題とすべきカテゴリーである（この点で我々はヤコブソンが様相のカテゴリー（ただしヤコブソンにおいては「法 mood」であるが）を転換子の一つとして指摘したことに注目したい: Jakobson R., Shifters, verbal categories, and the Russian verb. in: Russian and Slavic Grammar, p47）。80PG の様相の規定の根本的問題は、それを客観的様相=発話と現実との関係、主観的様相=話者と発話内容の関係、という形で二分してしまったことにありと私は考える。最近ではロシア語学でも модальность が発話行為理論と結び付けるなどの形で多く取り上げられている。今後の研究の動向に注目すべきであろう。

[参考文献]

- Бондаренко В.Н., *Отрицание как логико-грамматическая категория*. М.:Наука 1983.
- Богуславский И.М., *Исследования по синтаксической семантике*. М.:Наука 1985.
- Золотова Г.А., "Модальность в системе предикативных категорий," в *Otázky slovanské syntaxe*. III. сс93-97.
- Лингвистический энциклопедический словарь*. Советская энциклопедия, 1990.
- Метс, Н.А. (ред) *Практическая грамматика русского языка*. М.:Русский язык,1985.
- Падучева Е.В., *О семантике синтаксиса*. М.:Наука,1974.
- Падучева Е.В., "Между предложением и высказыванием: субъективная модальность и синтаксическая неподчинимость," *Rev. Etud. slaves* Paris, LXII/1-2. 1990, pp303-320.
- Панфилов В.З., "Отрицание и его роль в конституировании структуры простого предложения и суждения," *ВЯ*. 1982, №2. сс36-49.
- Русская грамматика*. АН СССР, 1980. т.II.
- Селиверстова О.Н., *Местоимения в языке и речи*. М.:Наука, 1988.
- Шатуновский И.Б., "Аномалия и отрицание," *Логический Анализ языка*.
- Противоречивость и аномальность текста*. М.:Наука, 1990. сс71-83.
- Austin J.L., *How to do things with words*. Oxford:N.Y.1962.
- Benešova E., "K Sémantičké klasifikaci českých modálních sloves," *Otázky slovanské syntaxe*. III. pp217-219.
- Fielder G., "Aspect and lexical semantics. Russian verbs of Ability," *SEEJ*. 1990. pp192-207.
- Fraser B., "Hedged Performatives," Cole & Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* Vol.3. Speech Acts. N.Y.:Academic Press, 1975. pp187-210.
- Grepel M., "K podstaté modálnosti," *Otázky slovanské syntaxe*, str23-38.
- Hills M., "The performative force of the interrogative in colloquial russian: from direct to indirect speech acts," *SEEJ*, 1991. vol.35, 1. pp98-114.
- Hintikka J., "Semantics for propositional attitudes," in: Linsky (ed) *Reference and modality*. Oxford. 1971. pp145-167.
- Horn L., *A natural history of Negation*. University of Chicago Press. 1989.
- Jakobson R., "Shifters, verbal categories, and the Russian verb" in: *Russian and Slavic Grammar*. Mouton, 1984. pp41-59.
- Koenitz B., "Bemerkungen zur Stellung der tschechischen Modalverben im System der Satzmodalität," в *Otázky slovanské syntaxe*. III. pp205-211.
- Kress (ed) *Halliday M.A.K.:System and Function in Language, Selected Papers*. Oxford U.P. 1976.
- Mluvnice češtiny*. (3) Skladba. Praha, Československá Akademie Věd, 1987.
- Otázky slovanské syntaxe*. III. Sborník symposia. Brno, 1973.
- Searle J. *Speech acts*. An essay in the Philosophy of Language. Cambridge U.P. 1970. 邦訳

(坂本百大、土屋俊訳) 「言語行為」 勁草書房
オールウッド、アンダソン、ダール「日常言語の論理学」産業図書 1979.
バンヴェニスト「ことばにおける主体性について」邦訳 (岸本通夫他訳) 「一般言語学の諸問題」みすず書房 pp242-252.